２０１２／０７／０８　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：パウロの誇り２
聖書箇所：ローマ人への手紙　１５章１５－２９節

　ローマ人への手紙１５章、今日は１５節のところからごいっしょに見てまいります。
前回、私たちが学んだように、ローマに住むクリスチャンたちは信仰において成長した者たちでした。
☆ローマ教会についての三つの特徴
　ですから、１４節に記されていたように「私の兄弟たちよ。あなたがた自身が善意にあふれ、すべての知恵に満たされ、また互いに訓戒し合うことができることを、この私は確信しています。」、彼らは善意にあふれ、知恵に満たされ、そして、互いに訓戒し合う、そのような人たちだったとパウロは言いました。
１．善意にあふれ
　彼らは救われた者にふさわしい歩みを為していたのです。クリスチャンとしてふさわしい歩みをしていたこのローマのクリスチャンたち、パウロはそのことを神に感謝しています。
２．すべての知恵に満たされ
　彼らは神のみことばをただ聞くだけでなく、そのみことばを日々の生活に適用していました。何が神の前に正しくて、何が喜ばれることで、何が主のみこころであるかを判断しながら歩んでいたのです。だから、知恵があると言われたのです。知識のある人みなが、必ずしも知恵ある人とは言えません。確かに、知恵を得るために知識は必要です。しかし、実践の伴わない知識は人間的なプライドをもたらし、信仰の成長における妨げとなります。知識だけを蓄えてもそれを実践することがなければ、成長するどころか却って妨げになります。プライドだけが増していくからです。このローマのクリスチャンたちはそうではなかった、みことばを聞きそれを実践していたのです。常に、神に喜ばれることが何であるかを考えて、それを判断することが出来る知恵のある者たちでした。
３．互いに訓戒し合うことができる
　三つ目に、パウロは「互いに訓戒し合う」と言っています。兄弟姉妹が罪を犯したら、彼らは愛をもって「それは間違っている」と言って、そのように励まし合い、時には、警告や忠告を与え合っていたと言います。なぜ、彼らはこのようにしたのか？それは主に喜んでいただくためでした。
　だから、非常にすばらしい教会がローマにはあったのです。ですから、このローマ人への手紙を見ていくと、このローマ教会に対する非難が一つも出て来ません。すばらしい教会だったということが分かります。このすばらしい教会にパウロはこの手紙を送ったのです。多くのクリスチャンたちがこの手紙を読んだ時に、ある者は不思議に感じたと思います。この手紙の意図にある種の疑問を抱いたかもしれません。なぜなら、私たちはローマ人への手紙の１章から見て来ましたが、そこに記されていたことはクリスチャンとして基本的なことが綴られていたからです。私たちが当然知っていることをパウロはここに綴り続けました。たとえば、１章では、私たち人間とはいかに罪深い者であるかということをパウロは教えました。いかに自分が罪深い者であるか、ローマのクリスチャンたちはみなそのことは知っていたはずです。また、１－４章では、罪に対する創造主なる神の厳しく、また、正しい審判があること、さばきがあることをパウロは教えましたが、そのこともみな知っていたはずです。また、５章でパウロは、罪の赦しは私たちの行ないによるのではなく、神の恵みによって与えられる、信仰によって与えられるということを教えましたが、ローマ教会の読者たちはそのことを知っていたはずです。６－１０章を見ると、そこにはクリスチャンに与えられている希望について、また、クリスチャンとしてどのように生きていくのかということが記されていました。もう、みんなそのことを知っていたはずです。
　なぜ、パウロは改めてこのようなことを記したのだろうと、読者たちがそのように考えていたであろうことをパウロは察しています。だから、１５節にこのように記すのです。「ただ私が所々、かなり大胆に書いたのは、…」と、これまで彼が書いたことを思い起こしながら、パウロはこの後、彼が記した手紙の内容に関する説明を加えていこうとするのです。私がなぜ、このような手紙を書いたのか？そのことをあなたがたに話しましょうと…。
☆ローマ教会への手紙に関するパウロの説明
１．大胆に書いた目的　　１５節
　大胆に書いた目的についてパウロは１５節の後半に記しています。「… あなたがたにもう一度思い起こしてもらうためでした。」と、パウロはここで非常に面白いことばを使います。「思い起こす」ということばは新約聖書にはここにしか記されていません。これは「再び思い起こさせる、記憶を新しくする」

という意味をもったことばです。ローマのクリスチャンたちがもうすでに知っていることをパウロが改めて記したのは、それらをしっかりと思い起こすため、もう一度、その真理に思いを馳せるために、もし、忘れているならもう一度思い出すために、パウロはこれらのことを記したというのです。なぜなら、我々はすぐに忘れてしまうからです。悲しいことに、私たちは日曜日のメッセージを聞いて何日間覚えていますか？そんなことを自慢できる訳ではないですが、悲しい現実はすぐに忘れてしまうことです。だから、何かしないといけないのです。それが私たちの弱さですから。

エレミヤという預言者はこのようなことを言っています。特に、南王国ユダに対して言っている訳ですが、エレミヤ書２章３２節「おとめが自分の飾り物を忘れ、花嫁が自分の飾り帯を忘れるだろうか。それなのに、わたしの民がわたしを忘れた日数は数えきれない。」、この南王国ユダは、北王国イスラエルに何が起こったのかを知っていたのです。紀元前７２２年にアッシリヤによって滅ぼされたことを知っていました。それにも関わらず、彼らはそのことを忘れてしまい、神に逆らって罪を犯していたのです。神が何をなさったのかを忘れてしまったのです。そこでエレミヤは「おとめが自分の飾り物を忘れ、花嫁が自分の飾り帯を忘れるだろうか。」と主のみつげを語ります。これらは自分を綺麗に飾るために使ったものですが、「自分を綺麗に見せるためなら飾り物を絶対に忘れないでしょう？自分にとって大切なものは絶対に忘れることがないでしょう？それなのに、どうしてあなたたちはそれらよりももっと大切なわたし(神)を忘れたのか？」と言って南王国ユダの人々を責めるのです。彼らは、主なる神は必ず罪をさばかれるということを忘れました。

また同時に、これまでイスラエルに対して示された主なる神のあわれみと赦し、祝福を忘れてしまいました。あのようにすばらしいみわざを神がなさったのに、人はすぐに忘れてしまうのです。私たちも同じではないですか？私たちもいつの間にか罪赦された時に持っていた喜びや感謝、情熱がなくなってしまいます。いったい、どうしてしまったのか？確かに、毎週、礼拝にまた祈祷会や様々な集会に出席し、また、奉仕も変わらず行なっている。しかし、何かが変わってしまった。かつての信仰と比べて同じではない…と。以前、皆さんにお話しましたが、被災地にあって一人の女性がイエス・キリストをお信じになりました。覚えておられますか？聖書を読みたくて仕方がなくて、そして、聖書を手にした時は余りの嬉しさにその晩は聖書を抱いて寝たといいます。そんなことを聞いた時に思いませんか？いったい、私はどうしてしまったのだろう？聖書を開くこともない、この一週間、礼拝用のカバンから聖書を一度も取り出すことがなかった。いったい、私たちはどうしてしまったのでしょう？

かなり前ですが、愛知県のある教会に奉仕に行ったときに、集会が終わって残った時間、駅前でトラクトを配ったり、だれかにイエスの話をしようということでみんなで出かけました。そこに向かう途中、ワゴン車の中で私の隣に座った一人の青年が、まだイエスを信じて日が浅かったのでしょう、「どのように話したらいいのですか？」と緊張の様子が伝わってきました。「何を話したらいいのか、どう話したらいいのか分からない」と。予定された場所に着きました。ワゴン車の扉が開かれたその瞬間、彼はいなくなってしまいました。教会に戻る時間になってみんなが集まって来ました。彼はまた私の隣に座ったのです。「どこに行っていたの？見かけなかったけど…」と聞くと、「いや、私は駅の向こう側にいました。」「何をしていたの？」「気がつけば、人々にイエスさまのことを話ししていました。」、「ここに来るまで車の中でどのように話したらいいのか？と私に聞いていたけれど、どうだったの？」「何を言ったらいいのか最初は分からなかったけれど、何とか人々にこのイエスさまのすばらしさを知ってもらいたいと思っていると、自分で勝手に話していました。」と言うのです。

私たちもかつてそのような時があったはずです。どうしてしまったのでしょう？主イエスによって罪の赦しをいただいてから、新しく生まれ変わってから、あなたの信仰は成長しているでしょうか？あなたの主への愛、それは成長しているでしょうか？確かに、かつての自分ではない。でも、よく自分を観察するならば、成長していないと。確かに、これは悲しい現実だと思います。感謝なことに、神はそのような私たちの弱さをご存じなのです。そこで、神はモーセを通してこのようなことを教えておられます。旧約聖書の申命記６章７節のところから、主なる神はモーセを通してこのように教えられました。

６：７－９「これをあなたの子どもたちによく教え込みなさい。あなたが家にすわっているときも、道を歩くときも、寝るときも、起きるときも、これを唱えなさい。:8 これをしるしとしてあなたの手に結びつけ、記章として額の上に置きなさい。:9 これをあなたの家の門柱と門に書きしるしなさい。」

（１）反復の指導

ａ）人に対して：「このようにしなさい」と父なる神はモーセを通して教えた訳です。それは「あなたが家にすわっているときも、道を歩くときも、寝るときも、起きるときも、」教えていきなさいということです。このことをよく考えてみてください。「家にすわっているとき」とは家の中のことです。「道を歩くとき」は家の外です。まず、神が言われることは家の中にいようと外にいようとどこにいようというこ

とです。次に「寝るときも、起きるときも、」とは眠っているときも目覚めているときも、つまり、一日中ということです。主はここで、モーセを通して、スペースのこと、また、時間のことを言われるのです。どこにいても、また、一日中行ないなさい、なぜなら、忘れるからです。
ｂ）自分に対して：また、自分に対しては「これをしるしとしてあなたの手に結びつけ、記章として額の上に置きなさい。」と言います。今もイスラエルへ行くと、テフィリンという２．５ｃｍ×３．７５ｃｍの箱を左腕の肘の少し上のところにつけたり、額につけている敬虔なユダヤ教徒たちを見ます。ここに記されている通りです。しかし、それが神の命令ではなかったのです。なぜ、左腕なのか？それは心臓に近いところだからです。聖書の中で心臓は「感情の座」と考えられていました。そして、額につけるのは頭がものを考える「思考の座」だからです。ですから、この命令を与えることによって神が人々に求めておられたことは、人間が神に対してささげる礼拝は、感謝や喜び、また、畏敬の念の伴った、まさに、心や思いのこもったものでなければならないということです。形式だけの礼拝を神は求めておられないということを明らかにされたのです。
　また実は、申命記６章５節には「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」と記されていて、その実践のためには、私たちの思いも私たちの感情も、そのすべてを神にささげることが必要だ。だから、このような命令がなされたのです。残念なことに、いつの間にかそれが形式になってしまったのです。彼らはその箱をそのようなところにつけることで、神はきっとお喜びになるだろうと思ったのです。でも、神の教えておられたことはそうではなく、私たちの心だったのです。
　そして同時に、「これをあなたの家の門柱と門に書きしるしなさい。」とあります。これは「メズザ」と言います。今でもイスラエルに行くと、個人の家でもホテルでも、どこでもそのドアのところにこのメズザがあります。ユダヤ人たちはそれに触って家に入り、家を出るときはそれに触って出て行きます。そこに聖書のみことばが入っているのです。これは神が教えておられるからということです。神が教えたかったことは、そのようなものを造ることではなく、家に入る時も家を出る時もいつでも主を覚えるようにと、そのためにそのように命じられたのです。
　ですから、申命記６章７節のところに「よく教え込みなさい。……これを唱えなさい。」とその大切さが記されているのです。すぐに忘れてしまうからです。一日中、どこにいても、人々に対してしっかりとみことばを教えていきなさい、自分自身もいつもみことばに触れているようにということです。
（２）その重要性　：　継続して教えることの大切さ
　申命記６章７節に「これをあなたの子どもたちによく教え込みなさい。」とありますが、「よく教え込む」ということばは非常に面白いヘブライ語が使われています。日本語に直訳すれば「勤勉である、精励」で、精を出して務める、精を出して励む、そのような意味に訳せることばですが、注意しておきたいことは、このことばは強調されているのです。つまり、してもしなくても良いということではなくて、これを絶対にしなさい、真剣によく教え込んでいきなさいと、この働きを強調して神は命じておられるのです。もう一つ、「唱えなさい」と訳されていますが、このことばは「話して聞かせなさい」という意味です。「唱える」と言うと、同じことばを繰り返すことのように勘違いする人もいるかもしれませんが、このことばは「聞かせてあげなさい、話して聞かせてあげなさい」という意味です。しかも、これも先程と同じように、強調の能動態が使われているのです。
　ですから、すぐに忘れてしまうから、どんな時にでもしっかりと彼らに教え込んでいきなさい、あなたも忘れるのだから、どんな時でもしっかりとそのみことばに思いを馳せなさいと、そのような命令を与えています。ですから、すべてそこに戻って来るのです。なぜ、私たちは忘れるのでしょう？それを何度も思い起こすことがないからです。もし、皆さんも今週学んだことをどこかに書いて毎日見ていたら、一週間経ってもそれを忘れることはないのです。勉強ではそうするのです。でも、みことばの勉強ではそうしません。だから、なぜ信仰が成長しないか分かるでしょう？みことばを実践しない限り私たちの信仰は成長しないのです。
・実際に新約の時代になって、パウロも、そしてペテロも、その反復の大切さを教えています
　テトス３章にこのように教えています。１節「あなたは彼らに注意を与えて、支配者たちと権威者たちに服従し、従順で、すべての良いわざを進んでする者とならせなさい。」と、ここに「注意を与えて」という動詞が出てきます。このことばは「思い出させる、想起させる」という意味です。新共同訳を見ると「思い起こさせなさい」と訳されています。「あなたは彼らに思い起こさせなさい。」、何度もそれを継続して行なっていくようにと現在形を使っています。またペテロも、Ⅱペテロ３：１で「愛する人たち。いま私がこの第二の手紙をあなたがたに書き送るのは、これらの手紙により、記憶を呼びさまさせて、あなたがたの純真な心を奮い立たせるためなのです。」、「記憶を呼びさまさせて」と記しています。前後しますが、Ⅱペテロ１：１２には「ですから、すでにこれらのことを知っており、現に持っている真理に堅く立っているあ

なたがたであるとはいえ、私はいつもこれらのことを、あなたがたに思い起こさせようとするのです。」とあります。
　ですから、神がモーセを通して教えただけでなく、旧約の時代だけでなく新約の時代においても、パウロやペテロもみなこのことを教えたのです。私たちは繰り返して聞かないとすぐに忘れてしまうからです。私たちは個人としてそのように努めることです。神の真理を私たちが繰り返し思い起こすことによってそれが私たちのものになっていくのです。
　皆さんにチャレンジしたいことは、もし、あなたの信仰が少し弱っているとするなら、もう一度主の恵みを思い出すことです。主の為された犠牲、あの十字架のみわざを思い出すことです。そして、肉体をもって敢然とよみがえられた生ける神のことを思い出すことです。思い出すためにはどうしたら良いか？もう一度聖書を開き、主に心を変えていただくことを祈りながら、そのみことばを読み返していくことです。何度も何度も。私たちが真理に立ち返っていくなら、その真理を通して、私たちは再び心が変えられていくことを体験するはずです。
　今日のテキストに戻って、「その目的で私はこのように大胆に書いた。確かに、あなたがたが知っていることだけれども、その真理を繰り返し学ぶことが必要だからそのことを書いたのだ。」と、そのようにパウロは説明をしました。
２．大胆に書いた理由　　１６節
　１６節「それも私が、異邦人のためにキリスト・イエスの仕え人となるために、神から恵みをいただいているからです。私は神の福音をもって、祭司の務めを果たしています。それは異邦人を、聖霊によって聖なるものとされた、神に受け入れられる供え物とするためです。」、パウロはここで、なぜ、このような手紙をあなたがたに書いたのか、それは実は、私には神から与えられた務めがあるからだと言います。
１）主から与えられた働き
　それは異邦人のために仕える者、私は異邦人のために働く者として神によって召されたと言います。それが自分の選択ではなく神の計画であったと、パウロは「神から恵みをいただいているからです。」と記しています。この務めに与ったのは神からの恵みである。神の恵みによって私はこの働きに召されたと言うのです。「神の恵み」とはすごいものです。
◎神から恵みをいただいているから
・「神の恵み」は彼を変えた
　ユダヤ人が異邦人に伝道に行くことは大変難しいことでした。思い出してください。ペテロもそうでした。コルネリオの所に行きなさいと言われた時に彼は精一杯抵抗しました。異邦人のところに行って彼らと交わることは彼らには考えられないことでした。まして、このパウロはユダヤ教において厳格な人物でした。ユダヤ人であることを誇っていました。しかし、その彼が神の恵みによって変えられたのです。喜んで神のみこころに従おうと彼は従って行くのです。この務めを神がくださった以上、私は自分がどう思うかではない、神からそのように召されたのだから私はこの働きに喜んで従って行くと、そして、彼は異邦人に仕える働き人となったのです。そのように変える力、人を根底から変える力、それが神の恵みです。
・「神の恵み」は彼に力を与えた
　同時に、神の恵みは信仰者に力を与えるものです。主から与えられたこの務めを彼が果たして行くために、この神の恵みをいただきながら、この力をいただきながら彼が歩んだことはまぎれもない事実です。彼自身がこのように言っています。Ｉコリント１５：１０「ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです。」、神は私を恵みによって救ってくださり、そして、神に従って行くために必要な恵みを私に与え続けてくれていると言います。
　そうすると皆さん、神はあなたにもすばらしい務めを与えてくださっています。しかも、その務めを為すための力、助けを、すなわち、恵みを与えてくれているのです。そこで提案です。私たちは往々にして自分にできることを選ぶ者です。働き、奉仕を考える時に「私は何ができるか？」というところから考え始めます。違いますか？ですから、私たちの前にあることがこれは難しいと思ったら「難しい、止めましょう。これはどう考えても不可能と思えることだから止めましょう。」と言います。そして、私たちは自分でできると思うことを選択してしまいます。もし、あなたがそういう信仰者なら、今日から変わりましょう。どんな信仰者に変わるのですか？
◎「自分にできることを選ぶこれまでの信仰者」から、「神がしなさいと言われたことを、神の恵みをいただいて行なう信仰者」へと変わるのです。
　自分でできるできないを判断して、やるやらないを決めるのではなく、神が私に何を望んでおられる

かを探って、それに従って行こうとする信仰者です。なぜなら、それを行なうために必要な力を神がくださるからです。私たちが直面するいろいろな問題を見た時に、時には余りにも山が高すぎて「私はこんなのは登れない」と思う時があります。人間的に見た時に不可能だと思えるようなチャレンジがあります。それに似たことを皆さんも経験されておられるでしょう。「もう、無理、ダメだ。」と思うようなことでも、感謝なことに、神の助けがそこにあるのです。皆さん、この聖書が私たちに教えていることは神には不可能はないということです。旧約の多くの先輩たちが歩んできたその歩みを見た時に、人々は無理だと思うことに直面しました。難攻不落のあのエリコの城壁を見てみんなダメだと思いました。確かに、人間の力では無理だったでしょう。しかし、神には不可能がないことを示すために、人間には絶対考えられない方法をもって神はあの城壁を壊されました。グルグル回って叫ぶだけでした。どうしてそんなことで城壁が壊れますか？神だから出来るのです。それが神です。全能のお方だからです。その全能の方の力が与えられているにも関わらず、私たちは言うのです。「不可能です。だから、自分たちに出来ることをします。」と。

　そのような消極的な信仰者から積極的な信仰者に変わることです。神が良しとされること、神がしなさいと言われることを喜んでしましょう。なぜなら、その力は神が備えてくださり、神が助けてくださるから、そんな信仰者が必要であり、そんな信仰者を神は使って来られたのです。パウロという人物を見た時に、彼はまさにそういう人でした。自分がどう思うかなどはどうでも良かった、神が何を望んでおられるのか、それを探りそれに従ったのです。だから、用いられたのです。感謝ことは、あなたも神によって使われるのです。神はあなたを同じように用いてくださるのです。

２）その働き

　さて、このパウロに与えられた働きについて、パウロはこの後説明を加えています。１６節の続きを見てください。「私は神の福音をもって、祭司の務めを果たしています。」、私は異邦人に仕える者だと言って、そして、その詳しい説明として「私は…祭司の務めを果たしています。」と言います。しかも、「神の福音をもって、」という説明をしています。何のことでしょう？「福音宣教」のことです。伝道のことです。なぜなら、祭司に与えられた務めの一つは、主にささげ物をささげることです。その当時の人々は祭司を見ていますからよくそのことが分かっていました。しかも、このみことばは私たちにそのささげ物が何であるかまで教えてくれています。１６節の後半に「それは異邦人を、聖霊によって聖なるものとされた、神に受け入れられる供え物とするためです。」と、つまり、「異邦人が私がささげる供え物です」とパウロは言うのです。しかも、この１６節を見ると、この文法は私たちに、その目的のために彼は祭司として働いているということをここで教えようとしています。異邦人をささげるというその目的のためにパウロ自身が祭司として働いていること、そのことをパウロはここで教ようとしているのです。しかも、この供え物について見ると条件が記されています。その条件は「聖霊によって聖なるものとされた」と書かれています。聖霊なる神の働きをいうのです。

　少しまとめます。なぜ、パウロはここで祭司の働きということを話したのでしょう？その当時の読者たちはこのたとえによってパウロの言わんとしていることをよく理解できたからです。この当時の人々は、祭司のことを言うとよく分かったのです。残念ながら、私たちにはよく分からないから説明が必要なのです。祭司の責任は、いけにえをささげること、供え物をすることでした。それでパウロは、私は祭司としてあるものをささげている。そのささげ物は異邦人であると言うのです。もっと言えば、異邦人が救いに与ったなら、その人たちを私は供え物としてささげると言うのです。だから、パウロは今見たように「聖霊によって聖なるものとされた」と言ったのです。これは救いのことです。しかも、罪人がその救いに与るのは聖霊なる神の働きだと言うのです。

　テトス３：５を見ましょう。「神は、私たちが行なった義のわざによってではなく、ご自分のあわれみのゆえに、聖霊による、新生と更新との洗いをもって私たちを救ってくださいました。」、パウロはここで救いのことを言っています。今、私たちがローマ人への手紙の中で見ているように、聖霊なる神によって聖められる、つまり、救われるということです。そのことをここでは「聖霊による新生、聖霊による更新」と記しているのです。

・「新生」＝生まれ変わるということです。「人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」（ヨハネ３：３）とイエスが言われたように、新しく生まれ変わることです。永遠の地獄、永遠のさばきに向かっていた者が永遠のいのちをいただく、そのように生まれ変わるということです。

・「更新」＝新しくされるということです。神を憎んでいた者が神を愛する者になるということです。神に逆らっていた者が神を喜ばせる者になるのです。造られた本来の目的に背いて生きていた者が、本来の目的に沿って生きる者に変わるということです。それが救いなのです。

　新しく生まれ変わって罪が赦されて、永遠の滅びに向かっていた私たちが永遠のいのちに与って、永

遠の天国に至る、神に逆らっていた者が神に従う者へと変えられるのです。この働き、この救いのみわざを聖霊なる神が為してくださるということです。そして、ここにおられるほとんどの皆さんが、それを経験されています。神が働いて皆さんを生まれ変わらせてくださった、神が働いて皆さんを神を愛する者に造り変えてくださったのです。

１９５５年の夏が終わった頃、５人のアメリカ人宣教師たちは南米エクアドルへ出かけました。皆さんもよくご存じかと思いますが、この５人の宣教師たちはエクアドルのジャングルに住むインディアンたちにイエス・キリストの福音を語りたいと願って出て行きました。そして、この５人は翌年の１月８日に、５人そろって槍によって殺されました。リーダー格であったジム・エリオットはこのとき２８歳であったと言います。３人の大学の友達が、いつも祈りながら夢見ていました。「我々はまだイエスさまの福音が伝わっていないあのエクアドルに行って、ジャングルに行って、あの人たちにこのイエス・キリストの救いを伝えたい」と。数ヶ月で、彼らはいのちを落としてしまいました。しかし、驚くべきことを神は為さったのです。それは１９５６年のことでした。２０００年にアムステルダムで伝道会議が開かれて、そこである人物が立ち上がってこんな話をしたのです。その人物の名前はギダダと言いました。この人物こそ、その５人の宣教師のいのちを絶った人物でした。槍をもって宣教師たちを突き刺し彼らを殺した張本人でした。彼はその場でこのようなことを言うのです。「我々は先祖以来、憎しみと殺し合いの連続でした。宣教師も自分たちを殺しに来たと思い、自分たちの土地を守るために彼らを殺しましたが、そのとき心は真っ暗で罪に汚れていました。聖霊と宣教師に教えられ、キリストの十字架により私の心は白くなりました。今度は宣教師によってではなく私たちが福音を伝えています。」と。すごいことだと思いませんか？かつて宣教師たちを殺した彼が今度は宣教師に変わって「イエス・キリストこそが神であり、我々に救いをもたらす唯一の救い主だ。」というメッセージを語っているのです。

神はこのような変化を人々にもたらされるのです。今私たちが見て来たように、新生と更新の洗いをもって神は私たちを生まれ変わらせ新しい者に造り変えてくださる。このような救いを信じるすべての人に神は約束してくださったのです。このすばらしい救いは聖霊なる神によって与えられる、そして、その聖霊なる神によってこの救いが与えられた者、その人こそ神の前に受け入れられる者だと言うのです。もう一度今日のテキストを見てください。１６節**「聖霊によって聖なるものとされた、神に受け入れられる供え物とするためです。」**、罪赦されて救いに与った者、その人こそ神の前に喜ばれる供え物であるということです。

当時のいけにえもそうでした。神の前にどんなものでもささげてもいいのではなかった、聖いものをささげなさいと言われたのです。なぜなら、神が聖い方であるから。聖霊によって罪赦されて聖められた者です。パウロは言います。「私は救われた一人ひとりを神への供え物としてささげます。」と。そして、神はそれらを喜んで受け入れてくださるのです。

パウロはこのように救いに与った者たち、救いに与る者たちを供え物としてささげると言います。それが彼の願いでした。でも、救われる人々が起こるためには、起こされていくためには、福音を語らなければならないということをパウロは知っていました。ですから、**「そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。」**（ローマ１０：１７）と言います。福音を語らなければ人々はこの救いに与ることはないのです。私がいけにえとしてささげたいこの救われた人たち、その人たちが起こって来るためには福音を語らないといけないと言うのです。そこで、パウロはこの「福音」に興味深いことばを付け加えています。もう一度、１６節を見てください。**「私は神の福音をもって、祭司の務めを果たしています。」**と言いました。彼はただ「福音」とは言わなかった、「神の福音」と言っています。なぜなら、この福音のメッセージこそ神が人類に与えられた救いのメッセージだからです。このメッセージには罪の赦しと永遠のいのちを与えるという希望が含まれているからです。

だから、パウロはこうして熱心に福音を語り続けました。これは神が私たち人間に与えてくれたメッセージ、この福音こそ、神が私たちに与えてくださった希望のメッセージであると。私たちはどうでしょうか？皆さん、この福音こそが神のメッセージであり、このすばらしい救いのメッセージを神はパウロと同じように、私たちに託してくださったのです。そのことをパウロと同じように確信してこのメッセージを伝えておられるでしょうか？かつてはそうだったかもしれない。問題は今です。大切なことは、もう一度、神のすばらしいみわざを思い出して、その救いのみわざに答えていくことです。

先程紹介したエクアドルへ宣教に行った５人のアメリカの宣教師たちの話です。そのジム・エリオットがアウカの村に出発する前にこんなことを言ったと言われています。「アウカ族の救いのために死ぬ備えが出来ている」と。彼の奥さんであるエリザベツ・エリオットはこのようなことを言っています。「もし、ジムにどういう死に方をしたいかと聞くなら、彼はあの時と同じ死に方をしたいと答えることを確信している。」と。この５人の宣教師たちはいのちがけでした。「イエスを知らない人たちのとこ

ろに私たちは出て行って、人間に与えられた唯一のメッセージであるこの福音を語りたい。いのちを賭けてその働きをしたい。そして、そのためにいのちを落とすことがあっても私たちは感謝する。」と。そうして彼らは行きました。そして、驚くべきことに、この５人の夫たちを亡くしたその家族は、みな一度はアメリカに戻りましたが、何人かはもう一度その場に戻って、残されたインディアンたちに福音を語ったのです。いのちがけだったのです。このイエスを知らない人たちに、このすばらしい救いを知ってもらいたいといのちがけでこの働きをしたのです。このような人たちがいたのです。

間違いなく、そういう人たちが我々の周りにもいるのです。問題は、あなたがそういう人かどうかです。なぜ、この人たち、この５人の人たちがそんなに熱心だったのか？その答えは彼ら自身が与えてくれます。パイロットして働いたネイト・セインツはこんなことを言っています。ちょうど、彼らが殉教する一ヶ月前、１９５５年１２月１８日にこんなメモを残しています。なぜ、アウカ族の地に赴くのかを記しています。「神のみこころを求め、そして、自分の将来を考えるとき、小部族のために自分のいのちをささげることは正しいことだろうか？しかし、最後の審判の日にあらゆる民族や部族の中から、救われた者たちが神の御前に出て来ることは、預言的な意味をもつと理解している。私たちは、アウカ族の救いの突破口を開くことに使命を感じている。それが神を喜ばせることだと思っているのだ。このクリスマスのすばらしいひとときに、キリストを知る私たちは、一度も福音を聞く機会もなく、キリストのいない暗闇に落ち込んでいく人々の叫びを聞こうではないか。主がそのようにされたように、あわれみの心を持って動こうではないか。」と。彼らはただあわれみの心を持っただけではないのです。それを行動に移したのです。

願わくは、神が皆さんの心を開いてくださって、皆さんにあなたの愛する者がこの罪の赦しを得ていなければ永遠の地獄に向かっているというこの事実を、より鮮明に示してくださることを祈ります。この瞬間に、彼らは永遠の地獄に向かっている、私たちは何かをしないわけにはいけません。語るメッセージがあるのです。神の福音です。神が与えてくれた救いのメッセージです。このメッセージを用いて聖霊が人々を新しく生まれ変わらせ、新しく造り変えてくださるのです。そのメッセージを語る責任をあなたや私に神は与えてくださったのです。問題は、私たちが動き出すかどうかです、皆さん。出て行きましょう、私たちは。結果がどうあれ、このメッセージこそ神が託してくださったメッセージゆえに、罪人が赦される唯一のメッセージであるがゆえに、しっかりと神の助けをいただきながら語り続けることです。私たちのためではありません。神が喜んでくださるためにです。パウロのことばを借りるなら、「神の前にいけにえとしてささげるために」、そのために、私たちもこの一週間、福音を携えて出て行くことです。そのような歩みを今日からしてくださることを心から期待します。

《考えましょう》
１．大切な真理を忘れないための良い方法を挙げてください。
２．神への愛や感謝が日々増し加わるためには、どうすれば良いと思いますか？
３．パウロが福音宣教に熱心であったのはどうしてでしょう？
４．どうすればパウロのように熱心になれると思いますか？